

実践英語科目

卒業後も外国語を
学び続ける、そのきっかけと
なるような授業に。

吉田 朋正 准教授 (人文・社会学 国際文化コース)

首都大では英語の授業でクラス編成テストを行った上でクラスを分け、レベルに応じた授業を展開しています。「実践英語 I a」を担当している吉田先生に、受験英語とは異なる英語教育への取組と、その目標について聞いてみました。

「実践英語 I a」とはどのような授業で、
どのようなことを目標にしていますか？

受 験英語から大学で求められる英語力の習得へ、この授業を通して頭を切り替えてもらうことが目的です。入学時に行ったクラス編成テストを基にクラス分けを行い、各クラスで大学教育にふさわしい英語力の習得をめざします。授業では小説や専門誌などの英文を題材にして講読を実施、英語力の充実を図ります。工学系のクラスであればテクノロジー史を取り上げるなど、ある程度学生の興味のあるものを選ぶようにしています。英語に関しては、学生は皆、受験勉強というかたちで触れてきています。ただ大学でまず身につけてほしいのは、資格取得や就職活動に役立てるための英語でなく、論文を書いたり専門書を読むための英語力なのです。そこで求められるのは、大学受験のように〇×式で答えを解き明かしていくスキルではありません。英語の書籍を何十冊も読むという風に勉強法を切り替えてもらいたいのですが、この授業がそのきっかけになればいいと思っています。



授業ではどのようなことに取り組み、
どのような改善を行っていますか？

授 業で学生の反応が良かったテーマなどを題材に授業を進めるようにしています。英語の専門誌などを扱うことで、学生の知らなかった世界が広がればいいなと思っています。また、授業の内容が難しいといった意見を学生からももらうこともあります。そうした意見も参考にはしますが、基本的には難易度の高い内容に取り組むことが学生の力にもなると思っていますので、そこは敢えて少し難しいと感じるレベルに取り組んでもらっていますね。

この授業で今後取り入れたいこと、また授業を履修する学生に
伝えたいメッセージはありますか？

ま ず身につけてほしいことは、在学中はもちろん、大学卒業後も外国語を学ぶ習慣ですね。そのために必要になるのが、繰り返しますが多くの書物を通して英語に触れることなのです。英語は自然言語なので、プログラム言語のように効率的な勉強法があるわけではありません。日常用いられる言葉は、合理的な規則に還元しきれない生きた習慣です。ですから普段マスターしているつもり日本語でも、生まれてから一、二冊しか本を読んだことのない人が説得力のある文章を書くとは考えにくい。同様に英語の文章を書きたいと思うのなら、英語の本をたくさん読んでほしいのです。そうした経験の積み重ねから、生きた英語は身につけていきます。英語に限らず外国語を生涯にわたって学んでいくという習慣を、この授業を通して身につけてほしいですね。

INFORMATION

FDとは・・・Faculty Developmentの略。
授業改善のための組織的な取組をいいます。

首都大学東京では、授業改善のための組織的な取組として、授業アンケートの実施や教員向けのFDセミナーの開催など、さまざまな企画・活動を行っています。学生の皆さんも、これらの活動に積極的にご参加ください！



FDセミナーを開催しました。(2013.11.6)

「ティーチングからラーニングへ」という大学教育の転換が求められる中、大学ではどのような実践がなされているのでしょうか。FDセミナーでは「授業の理解を深めるアクティブ・ラーニングの導入」をテーマに、山形大学の杉原真晃先生による、教育方法学としての理論と授業実践についての講演を行いました。山形大では演習型授業として、「『知りたい』ことを決定する」「学問活動のおもしろさを味わう」を授業目標に、学生自らがテーマを決め、半年間かけて探求していくアクティブ・ラーニングを行っているとのこと。授業外で探求を進め、授業ではその成果を発表する形式が進めます。皆さんは、活動の自己目的化、つまり、何のために学ぶのか、それを学んでどうするのか、自ら問うことを忘れてはいけません。そのために、教員がサポートし、ヒントを提示しますが、これは皆さんが思っている以上に難しいのです。



講義型授業にもアクティブ・ラーニングを導入しています。セミナーでは、本学の教員からこれらの実践事例が紹介されました。大学には、高校までのような国で定めた学習指導要領がありません。皆さんが受ける授業は、大学がつくるカリキュラムや教員の創意工夫にかかっています。学生の皆さんがアンケートなどを通してFD活動に参加し、ともに首都大学東京での学びを深めていくことを期待しています。



編集後記

2013年度授業改善アンケートの結果をお届けします。今年度から、授業改善アンケートという名称に変更され、リーフレットの内容も大幅にモデルチェンジしました。アンケート結果を提示するだけでなく、授業改善に対する教員の実際の取組を紹介するとともに、みなさんの学習のお手伝いをしてくれるスタディ・アシスタントの声も載せております。授業を行う側(教員)の声と、授業を受ける側(学生)の声を結びつけることによって、質の高い学びの場(大学)が築けるのではないのでしょうか。このリーフレットは、そのための架け橋ともいえるでしょう。これからも、授業改善アンケートにご協力いただけますようお願いいたします。

2013年度FD委員会 委員
天野 晋介(都市教養学部法社会学系 准教授)



Study+ 2014春号(第1号) 編集発行:首都大学東京FD委員会
URL: http://www.comp.tmu.ac.jp/FD/

登録(26)3



深い学びにつなげる

Study+

Vol.01
2014.SPRING

全学共通科目の授業改善アンケートにご協力いただきありがとうございます。
学生の皆さんの意見を参考に、授業改善へ向けたさまざまな取組が行われています。
この『Study+』では、首都大学東京での「学び」をより深めていける情報をお届けします。

1 授業改善「裏側潜入レポート」

2 授業改善アンケート結果

学習サポート企画

知らない
と
ソ
ン
する?!

授業の「ワカラナイ！」を先輩に聞こう
スタディ・アシスタント編

『Study+』創刊のご挨拶

FD委員会委員長 山下 英明 教授

PROFILE
都市教養学部経営学系教授
2011年度より大学教育センター長及び
FD委員会委員長



学生の皆さんは、大学の学習が将来役に立つと思っていますか? 何に役立つのか実感できなくて、やる気を失いかけている人もいるかも知れません。大学で学ぶ目的の一つは、専門分野固有の知識や技術を修得することです。卒業後の進路によっては、大学で修得した専門的知識をそのまま社会で活かせる人も少なくないでしょう。しかし我々教員は、専門的知識そのものよりも、むしろその修得の過程が、より重要だと考えています。専門的知識を学ぶうえで、新しい情報を納得いくまで考えて自分のものにしたたり、知識を活用して自分の考えを論理的に展開したりと、「自ら考え、自ら学ぶ」ことによって、論理的・創造的思考力、問題解決力、多様性に対する対応力などの能力が身につくからです。この本物の考える力は、皆さんが卒業後どのような道に進んでもきっと役に立つはずですよ。

そこで本学では、皆さんが「自ら考え、自ら学ぶ」授業になるよう、授業を再設計する取組を進めています。授業担当者からの一方的な知識伝達型ではなく、学生参加型授業への転換です。また、効果的な予習・復習方法を示すことで、授業時間外にももっと学習するよう促していきます。このような授業改革について、皆さんからも多くの感想や要望が寄せられるよう、授業改善アンケートの質問項目も大幅に変更しました。今回創刊した『Study+』では、皆さんからの要望や授業改善の取組を紹介していきます。皆さんが主体的でより深い学びのために役立ててくれることを願っています。

授業改善 裏側潜入レポート

教養科目群



アンケートを基に
学生の知的好奇心に
応えるような内容を。

川原 裕之 教授 (理工学系 生命科学コース)

さまざまな分野の科目を開講している教養・基盤科目群はいろいろな学部・学系の学生が履修しています。川原先生担当の「バイオテクノロジー」もその一つ。どのようなスタンスで授業に臨まれているのか、その裏側に迫ります。

「バイオテクノロジー」とはどのような授業で、
どのようなことを目標にしていますか？

バ イオテクノロジーはいわゆる一般教養科目であり、履修する学生の専門分野はまちまちです。そうした中で私の授業では、まずバイオテクノロジーに興味を持ってもらうことを主眼としています。そのためにニュースでも話題になり、学生も関心を持っているような題材をテーマに授業を進めていきます。近年であればiPS細胞を題材に、万能細胞の確立に至る研究の流れや再生医療における最新のバイオテクノロジーを解説。その研究開発に関して、まずどのような部分に着目し、目標に到達できたのかを伝えていきます。特に知ってもらいたいのは、失敗を重ねながら目標をめざしたプロセスの部分です。この授業を通してバイオテクノロジーを含む自然科学に興味を持ってもらうと同時に、何か新しいことに触れたと感じてもらえればいいですね。またこの授業で実例として取り上げた興味の見つけ方や、その発展のさせ方は、幅広い分野に応用できる考え方であり、視点であると思います。

授業ではどのようなことに取り組み、
どのような改善を行っていますか？

学 生の理解度については、常に意識しています。難しすぎても、逆に簡単すぎたり既知っている内容であっても、学生は興味を失ってしまいます。学生が学びたいと思うような水準であるように、普段の授業での反応を参考にしつつ、内容を常に微調整しています。その際に役立つのが授業終了後に書いてもらうアンケートです。多くの感想や意見が書き込んであり、非常に参考になりますね。また細かな部分では、理工学系の学生ばかりではないので、専門用語はなるべく使わないよう、言葉の選び方にはとても気を配っています。



この授業で今後取り入れたいこと、また授業を履修する学生に
伝えたいメッセージはありますか？

他 の教養科目と同様に、私が担当している「バイオテクノロジー」は非常に広範囲な分野であり、この授業を学んだからといってバイオテクノロジーのすべてが理解できるわけではありません。そうした中で常に学生の知的好奇心を刺激する題材を選ぶことで、この分野への興味を持ってもらいたいと思っています。できればいくつかのトピックスを題材にして、より幅広い興味を持ってもらうことが理想です。また教養科目という性格上、専門的な内容まではなかなか踏み込むことはできないのですが、それでも授業の終わりになると私のところに質問に来る学生がいたり、さらに深い分野を学びたいと言ってくる学生がいます。『興味』を自ら掘り下げていくことは、能動的な学習への第一歩であり、その糸口を本授業で提供できればと思います。

2013年度版 授業改善アンケート結果

実施期間 前期2013年7月9日～22日 後期2014年1月9日～27日

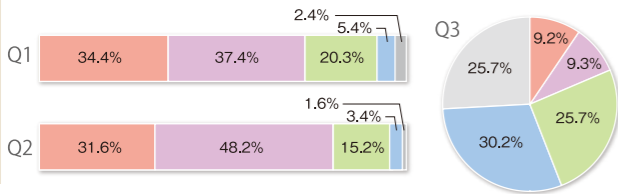
アンケート結果の詳細はFD委員会ホームページに掲載しています。
http://www.comp.tmu.ac.jp/FD/

基礎ゼミナール

前期▶履修登録者数 1,649人:回収数 1,293人 回収率 78.4%/授業数 80クラス:回収数 68クラス 回収率 85.0%
※前期のみ実施

こんな意見・提案がありました

- 先生への質問が多かった。もっと学生同士の議論が活発になる雰囲気が必要。
- 初めてのゼミなので、どう取り組めば良いのかをしっかりと教えてほしい。
- 発表者以外は気が抜けていたので、皆を巻き込む形式の方が良い。
- もっとグループ学習を増やした方が、深く考えて意見が出せると思う。



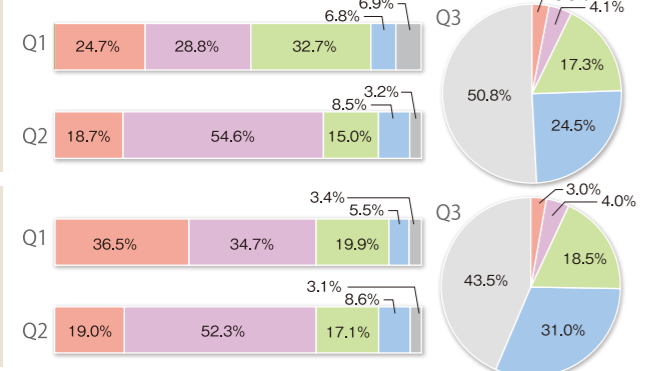
- 発表回数を2回として、2回目は質問に対する回答という形式にしたところ、提出されるレポートが充実してきた。
- 私自身の講義は一切やらない。学生には、「自分で考えること」「全員で学ぶこと」という授業のねらいを説明した。
- 講義を減らし、グループ討論を多くしたが、消極的なグループもあり、時間の割に効果があったかは疑問。
- 学生の興味・関心に合わせて文献を変更したところ、強い関心をもって授業に参加してくれたように思う。
- 昨年までは発表とレポートで評価していたが、ペーパーテストも実施した。従来の方法とテストでは結果がかなり異なり、重要な相違点だと思う。
- レポートの提出方法や資料・論文の収集方法を例として示した。論文を取り寄せるなど、経験にはなったが、それを読みこなして活用するにはまだ課題がある。

情報科目

前期▶履修登録者数 1,643人:回収数 1,216人 回収率 74.0%/授業数 38クラス:回収数 35クラス 回収率 92.1%
後期▶履修登録者数 457人:回収数 332人 回収率 72.6%/授業数 23クラス:回収数 23クラス 回収率 100.0%
※前期は「情報リテラシー実践Ⅰ」、後期は「情報リテラシー実践Ⅱ」で実施

こんな意見・提案がありました

- 授業内容に沿った課題が出されるので、理解を深められた。
- 内容が難しいので、前回の復習もしながら授業を進めてほしい。
- 学生それぞれの授業理解度をしっかり把握して、ついていけない学生が出ないよう配慮してほしい。
- チューターは教室全体を見て回り、わからなくなっている学生がいないか確認すべき。



- 情報倫理に関する講義では、ジグソー法を取り入れてグループ内発表と全体発表をさせた。ジグソー法により、課題達成への意欲や責任感が向上し、主体的学習を促せた。
- エクセルでグラフ・表をきれいに作成できるようになりたいという要望があり、授業で実施した。学生同士で比較しあうことでそれぞれのグラフの性質を見つけ、前向きな発言が見られた。
- 授業進度を遅くしてみたが、時間が足りなくなった。来年度はオンデマンドなどで解決できないか考えている。
- 課題が多いとの意見があるが、授業内容の理解や授業外学習の確保のためには必要な課題量であることを学生に説明した。

共通アンケート項目

Q1 この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった。
 そう思う ややそう思う どちらでもない あまりそう思わない そう思わない

Q2 授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた。
 そう思う ややそう思う どちらでもない あまりそう思わない そう思わない

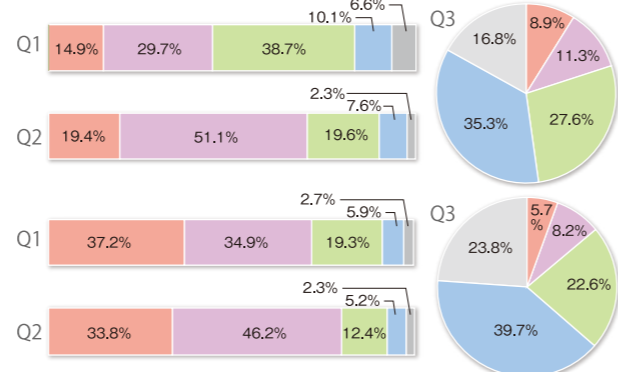
Q3 授業時間以外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか？(予習、復習、課題、試験勉強、この授業の理解をさらに深めるための自主学習を含む。)
 2時間以上 90分程度 1時間程度 30分程度 ほぼ0時間

実践英語科目

前期▶履修登録者数 1,764人:回収数 1,412人 回収率 80.0%/授業数 95クラス:回収数 88クラス 回収率 92.6%
後期▶履修登録者数 1,599人:回収数 1,231人 回収率 77.0%/授業数 79クラス:回収数 73クラス 回収率 92.4%
※前期は「実践英語Ⅰa」、後期は「実践英語Ⅱb」で実施

こんな意見・提案がありました

- グループ学習があり、他の人と意見交換する機会ももてた。
- 学生の意見を取り入れ、授業形態と一緒に考えながら進めてくださった。
- 文法や文構造の解説を丁寧にしてほしい。
- ある程度、授業方針を固め、予習した内容が活かされる授業にしてほしい。



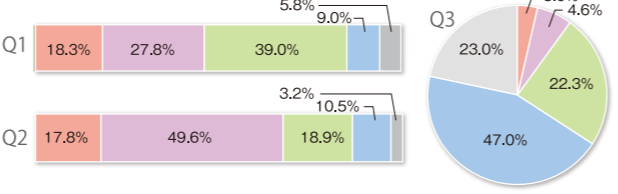
- 始めにプリント教材を使用し、後にテキストを使用。テキストと並行して各自の課題図書を決め、読み始める作業の手助けをするために合同発表の機会を設けた。
- 毎回のセクションの英文量が多かったため、和訳の時間を減らし、プリントなどで内容理解を促した。学生も徐々に和訳せず英文を理解することに慣れ親しんできた。
- 長文に慣れておらず、論旨展開の把握が困難との声があったため、丁寧に確認しつつ全体を進めた。構文や単語の意味に注意しながら予習する習慣がついたようだ。
- 当初、英語があまり好きではないという学生が多かったため、なるべく興味を引くトピックを探した。決して進度は速くなかったが、学生達は無遅刻・無欠席だった。
- 学生の理解度を見ながら、当初予定した進度を変更、調整を行った。学生は授業や課題に対してじっくりと取り組んでいた様子がわかった。

未修言語科目

後期▶履修登録者数 2,509人:回収数 1,749人 回収率 69.7%/授業数 112クラス:回収数 101クラス 回収率 90.2%
※後期のみ「ドイツ語Ⅰ」「フランス語Ⅰ」「中国語Ⅰ」「朝鮮語Ⅰ」で実施

こんな意見・提案がありました

- リーディングの授業なので、簡単な課題図書などがあれば良かったと思う。
- 板書などで、何をめざし、今は何をしているのか示してくれるともっと取り組みやすかった。
- 作文の問題は難しかったけど、自分の勉強不足な部分を見つけられた。
- ドイツ語を使った簡単なゲームを取り入れてくれたので、楽しみながら学べた。



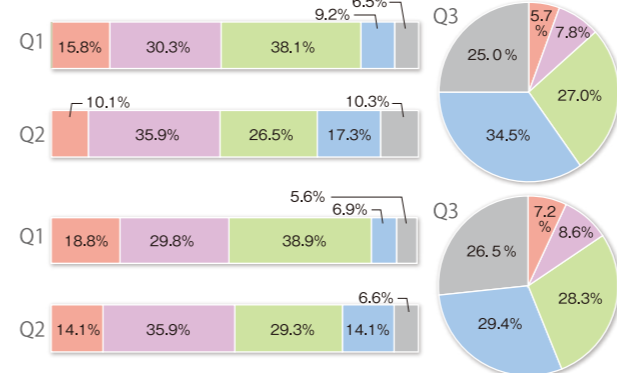
- 自作の文法の教科書に、学生が自習できるよう説明を載せておいた。学生の理解度や出席率、集中力が高まった。
- 授業の進め方と到達目標をはじめに学生と話し合って決めた。目的を説明したうえで対話練習はモチベーションを高め、学生が積極的になった。
- 文法・読解・会話のバランスとれた平易な教材を使用。DVD付なので、ドイツ事情についても学生は興味をもったようだ。
- 感想を随時書いてもらい、好評な方法を継続。課ごとに作文に取り組みさせることで、文構築の技術を会得する効果があり、緊張感も続いた。

理系共通基礎科目

前期▶履修登録者数 4,811人:回収数 3,260人 回収率 67.8%/授業数:67クラス:回収数:61クラス 回収率 91.0%
後期▶履修登録者数 3,960人:回収数 2,433人 回収率 61.4%/授業数 59クラス:回収数 51クラス 回収率 86.4%

こんな意見・提案がありました

- 授業の最初に、前回の復習とその日の授業概要の説明があったのが良かった。
- 提出した演習問題の採点は返却してほしい。
- 授業進度が速かった。ペースを変えられないのであれば、プリントを配って補足してほしい。
- 教科書をそのまま板書するのではなく、もっと先生独特の考え方を教えてほしい。



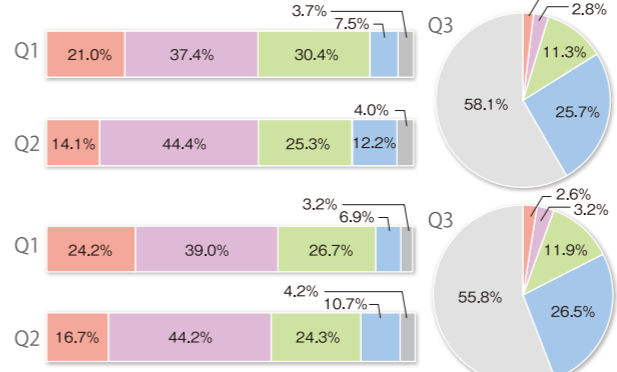
- 授業の最後15分程度で演習を行うようにした。内容が初歩的なうちは効果的だったが、複雑になるにつれ、機械的な計算より考える部分が多くなり、短時間ではカバーできないと感じた。
- 授業資料の電子ファイルを配布したところ、一部の学生はiPadやノートPCに入れて、それを見ながら授業を受けるなど、有効に利用している。
- 今年は教科書を一冊指定したため、用語の違いに悩むことなく、復習しやすかったと思う。しかし、カリキュラムの全てを含む教科書は少なく、選定には更なる改善が必要。
- 内容をしばり、理解しやすいようにした。多くの学生には有益であったと思うが、優秀な学生には簡単すぎる講義となったかもしれない。

教養科目群・基盤科目群

前期▶履修登録者数 13,954人:回収数 6,445人 回収率 46.2%/授業数 96クラス:回収数 80クラス 回収率 83.3%
後期▶履修登録者数 10,667人:回収数 5,071人 回収率 47.5%/授業数 84クラス:回収数 66クラス 回収率 78.6%

こんな意見・提案がありました

- 関連する映像やプリント資料が活用され、授業に興味ももてた。
- ゲストスピーカーの方から貴重なお話を聞けて、世界観が広がった。
- PPTの情報量が多いのに、どんどん次へ行ってしまう。ノートに書けません。
- レジュメを配り、授業の流れや進度を明確にしてください。



- 講義の配布資料を紙から電子データ(PDF)に変更したところ、学生それぞれの方法で資料を活用するようになった。
- 授業内で小テストを行い、学生が自身の達成度を試験前に確認できるようにした。試験に対する不安を訴える学生がおり、効果があったように思う。
- 理系科目なので、授業中に文系学生に問いかけるなどして、文系に配慮した説明や課題設定を心がけた。
- 内容が専門的過ぎるとの指摘が学生からあったが、この授業で専門用語を覚えるなどは期待していないこと、内容の主旨・要点を自分の言葉で書けるようになってほしいということを説明した。
- 学生とのコミュニケーションの充実を図るよう工夫している。学生の態度がより積極的になり、私語もなくなった。

学習サポート企画

知らないと言わずに
ソッとする?!

授業の「ワカラナイ!」を先輩に聞こう
スタディ・アシスタント編

図書館本館にある「ラーニング・コモンズ」内に設置されている学習相談デスクには、学習に関する疑問に答えてくれる大学院生のアシスタントがいます。勉強以外のことも、気軽に相談してみましよう。



今回答えてくれたのは…



スタディ・アシスタント
片山 尊奈 さん
SD研究科インダストリアルアート学域修士2年
縦のつながりが以前ほど強くないと言われる最近の大学生は、学生生活での悩みや疑問を相談できる相手が少ないと言われています。そんな学生に応えられる存在でありたいですね。

勉強での疑問や生活上の悩みを解決することで、より豊かな学生生活が送れるように。

学習相談デスクではどのようなサポートを行っているのですか？ またスタディ・アシスタントはどのようなことを担当しているのですか？

図書館や資料の案内を行うとともに、授業の勉強で分からないことがある時、基礎的な部分の実力が足りないと感じた時などに相談に乗り、先輩としてアドバイスしています。SA(スタディ・アシスタント)は大学院生で構成され、各専門分野での知識を生かして大学生のサポートにあたっています。勉強の相談・指導だけでなく、履修相談や研究室の選び方、就職相談など、さまざまな疑問や悩みに応えるようにしています。

どのような質問をよく受けますか？ また、これまでSAとして活動してきて、印象に残っている質問はありますか？

やはり同じ学部の後輩から履修などの相談を受けることが多いですが、中には転部について相談してきた学生もいます。勉強のことで「先生に聞くほどではないけれど…」といった相談もあります。気軽に質問して疑問を解決してもらうことがこのデスクの目的なので、些細なことでも気軽に相談してほしいですね。



スタディ・アシスタントになって、新たに取入れたことはありますか？

一人で行ったわけではないのですが、よりSAの活動を知ってもらおうと、ソーシャルメディアを使って情報を発信するようになりました。また、プレゼンテーションルームを使用して、進路の決め方などをテーマに毎月イベントも開催しています。

学習相談デスクやコミュニケーションスペースを効果的に活用する、オススメの方法があったら教えてください。

コミュニケーションスペースには、グループワークにも個人学習にも最適な場所が整っています。貸出用PCからホワイトボードまで揃っているので、勉強会やゼミ活動にも最適です。また、学習相談デスクでは、学習以外にもさまざまな相談を受け付けています。就職のことからメンタルなことまで、まずは私たちに相談してくれたら、より専門的なアドバイスができる部署へもつなぐことが可能です。学習相談デスクを活用することで、豊かな学生生活を送ってもらいたいと思っています。



施設の利用方法

■ 開設時間 (平日)9:00～22:00 ■ 担当学生(院生) 22名(2014年4月現在)
SAのプロフィールとスケジュールはWebで確認することができますのでこちらもチェックしてみましょう。

URL <http://www.lib.tmu.ac.jp>